

身体障害者診断書・意見書（脳原性運動機能障害用）

氏 名	大昭 平令	年 月 日生（ ）歳	男・女										
住 所													
1 障害名(部位を明記)													
2 原因となった 疾病・外傷名		交通、労災、その他の事故、疾病、 自然災害、先天性、その他（ ）											
3 疾病・外傷発生年月日 昭 平 令 年 月 日 ・ 場所													
4 参考となる経過・現症(画像診断及び検査所見を含む。)													
障害固定又は障害確定(推定) 昭 平 令 年 月 日													
5 総合所見(障害認定に必要な事項、臨床症状、目的動作能力の障害、将来再認定について明記)													
【 将来再認定： 不要 ・ 要（軽度化・重度化）⇒ 再認定時期： 1年後 ・ 3年後 ・ 5年後 】													
6 その他参考となる合併症状													
上記のとおり診断する。併せて以下の意見を付記する。													
令和 年 月 日													
病院又は診療所の名称													
所 在 地													
電 話 番 号 () —													
診 療 担 当 科 名 科 第15条指定医師氏名													
(署名又は記名押印)													
※訂正がある場合は、訂正印等をお願いします。													
身体障害者福祉法第15条第3項の意見(障害程度等級についても参考意見を記入)													
障害の程度は、身体障害者福祉法別表に掲げる障害に													
・該当する。 (級相当) ⇒ ・該当しない。		<table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width:50%;">部 位</th> <th style="width:50%;">等 級</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>両 上 肢</td> <td style="text-align: center;">級</td> </tr> <tr> <td>右 上 肢</td> <td style="text-align: center;">級</td> </tr> <tr> <td>左 上 肢</td> <td style="text-align: center;">級</td> </tr> <tr> <td>移動機能</td> <td style="text-align: center;">級</td> </tr> </tbody> </table>		部 位	等 級	両 上 肢	級	右 上 肢	級	左 上 肢	級	移動機能	級
部 位	等 級												
両 上 肢	級												
右 上 肢	級												
左 上 肢	級												
移動機能	級												

(注意)

- 1 障害名には脳原性運動機能障害等を記入し、原因となった疾病・外傷名には、障害を生じた病名(脳性麻痺等)を記入してください。
- 2 7級の障害1つのみでは、身体障害者福祉法別表に掲げる障害に該当せず非該当となります。
- 3 障害認定に必要な事項として神経学的所見、関節可動域及び筋力テストにおいて異常が認められる場合は各所見欄に記入してください。
- 4 障害区分や等級決定のため、内容についてお問い合わせする場合があります。

脳原性運動機能障害用

※この様式は、脳性麻痺及び乳幼児期に発現した障害によって脳性麻痺と類似の症状を呈する者
で肢体不自由用を用いることが著しく不利な場合に使用することができる。

※知的障害等で検査ができない場合は、本診断書ではなく、肢体不自由用の診断書を用いて、
障害認定を行ってください。

(該当するものを○で囲むこと。)

1 上肢機能障害

ア 両上肢機能障害

<紐結びテスト結果>

1度目の1分間	_____	本
2度目の1分間	_____	本
3度目の1分間	_____	本
4度目の1分間	_____	本
5度目の1分間	_____	本
計	_____	本

イ 一上肢機能障害

<5動作の機能テスト結果>

	右	左
a 封筒をはさみで切る時に固定する。	(可能 ・ 不可能)	(可能 ・ 不可能)
b 財布からコインを出す。	(可能 ・ 不可能)	(可能 ・ 不可能)
c 傘をさす。	(可能 ・ 不可能)	(可能 ・ 不可能)
d 健側のつめを切る。	(可能 ・ 不可能)	(可能 ・ 不可能)
e 健側のそで口のボタンをとめる。	(可能 ・ 不可能)	(可能 ・ 不可能)

2 移動機能障害

<下肢・体幹機能評価結果>

a 伝い歩きをする。	(可能 ・ 不可能)
b 支持なしで立位を保持し、その後10m歩行する。	(可能 ・ 不可能)
c いすから立ち上り、10m歩行し、再びいすに座る。	(可能 ・ 不可能)
	秒
d 50cm幅の範囲内を直線歩行する。	(可能 ・ 不可能)
e 足を開き、しゃがみこんで再び立ち上がる。	(可能 ・ 不可能)

3 神経学的所見その他の機能障害の所見 (該当するものを○で囲む。)

- (1) 感 覚 障 害 なし・感覚脱失・感覚鈍麻・異常感覚
- (2) 運 動 障 害 なし・弛緩性麻痺・痙性麻痺・不随意運動 ()
・固縮・振戦・運動失調・その他

(3) 深部腱反射・病的反射	右	左
① 上腕二頭筋反射	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱
② 上腕三頭筋反射	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱
③ アキレス腱反射	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱
④ 膝蓋腱反射	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱	亢進 ・ 異常なし ・ 減弱
⑤ 足間代(クローヌス)	＋ ・ －	＋ ・ －
⑥ ワルテンベルグ	＋ ・ －	＋ ・ －
⑦ バビンスキー反射	＋ ・ －	＋ ・ －

- (4) 排尿・排便機能障害 なし・あり

関節可動域 (ROM) と筋力テスト (MMT) (この表は必要な部分を記入)

筋力テスト()	関節可動域	筋力テスト()	関節可動域	筋力テスト()
() 前屈		後屈 ()		() 左屈
() 前屈		後屈 ()		() 右屈
右		伸屈 ()		左
() 屈曲		() 伸展		() 屈曲
() 外転		() 内転		() 外転
() 外旋		() 内旋		() 外旋
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 回外		回内 ()		() 回内
() 掌屈		背屈 ()		() 掌屈
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 外転		内転 ()		() 外転
() 外旋		内旋 ()		() 外旋
() 屈曲		伸屈 ()		() 屈曲
() 底屈		背屈 ()		() 底屈

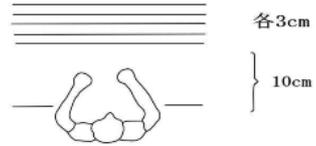
◎その他の所見(記載項目のない機能障害や能力障害等について記入)

(備考) 上肢機能テストの具体的方法

ア 紐むすびテスト

事務用とじ紐(概ね43cm規格のもの)を使用する。

- ① とじ紐を机の上、被験者前方に図の如く置き並べる。
- ② 被験者は手前の紐から順に紐の両端をつまんで、軽くひとむすびする。



- (注) ・上肢を体や机に押し付けて固定してはいけない。
- ・手を机の上に浮かしてむすぶこと。

- ③ 結び目の位置は、問わない。
- ④ 紐が落ちたり位置から外れたときには、検査担当者が戻す。
- ⑤ 紐は、検査担当者が随時補充する。
- ⑥ 連続して5分間行っても、休み時間を置いて5回行ってもよい。

イ 5動作の能力テスト

- a 封筒をはさみで切る時に固定する。
患手で封筒をテーブル上に固定し、健手ではさみを用い封筒を切る。患手を健手で持って封筒の上ののせてもよい。封筒の切る部分をテーブルの端から出してもよい。はさみは、どのようなものを用いてもよい。
- b 財布からコインを出す。
財布を患手で持ち、空中に支え(テーブル面上ではなく)、健手でコインを出す。ジッパーを開けて閉めることを含む。
- c 傘をさす。
開いている傘を空中で支え、10秒間以上まっすぐ支えている。立位でなく座位のままでもよい。肩にかついではいけない。
- d 健側のつめを切る。
大きめのつめ切り(約10cm)で特別の細工のないものを患手で持って行う。
- e 健側のそで口のボタンをとめる。
のりのきいていないワイシャツを健肢にそでだけ通し、患手でそで口のボタンをかける。女性の被験者の場合も男性用ワイシャツを用いる。

(注意)

- 1 関節可動域は、他動的可動域を原則とする。
- 2 関節可動域は、基本肢位を0度とする日本整形外科学会日本リハビリテーション医学会の指定する表示法とする。
- 3 関節可動域の図示は、 $\leftarrow \rightarrow$ のように両端に太線を引き、その間を矢印で結ぶ。強直の場合は、強直肢位に波線()を引く。
- 4 筋力については、表()内に×、△、○若しくは0、1、2、3、4、5を記入する。
筋力0、1、2該当…筋力が消失又は著減(×印)
筋力3該当…筋力半減(△印)
筋力4、5該当…筋力正常又はやや減(○印)

筋力表

5 [○] (正 常)	normal	: 正常の筋力。
4 [○] (優)	good	: かなりの抵抗にうちかって運動できる。
3 [△] (良)	fair	: 重力にうちかって運動できる。
2 [×] (可)	poor	: 重力を除くと運動できる。
1 [×] (不 可)	trace	: 筋収縮をふれるが運動はおこらない。
0 [×] (ゼ ロ)	zero	: 筋収縮をふれない。

- 5 (PIP)の項母指は、(IP)関節を指す。
- 6 DIPその他手指の対立内外転等の表示は、必要に応じ備考欄を用いる。
- 7 図中塗りつぶした部分は、参考的正常範囲外の部分で、反張膝等の異常可動はこの部分にはみ出し記入となる。

例 示

(1) 伸展 屈曲(2)